

## 第一部

# 教育活動の一環としてのボランティア活動

石 積 勝

## 1 はじめに

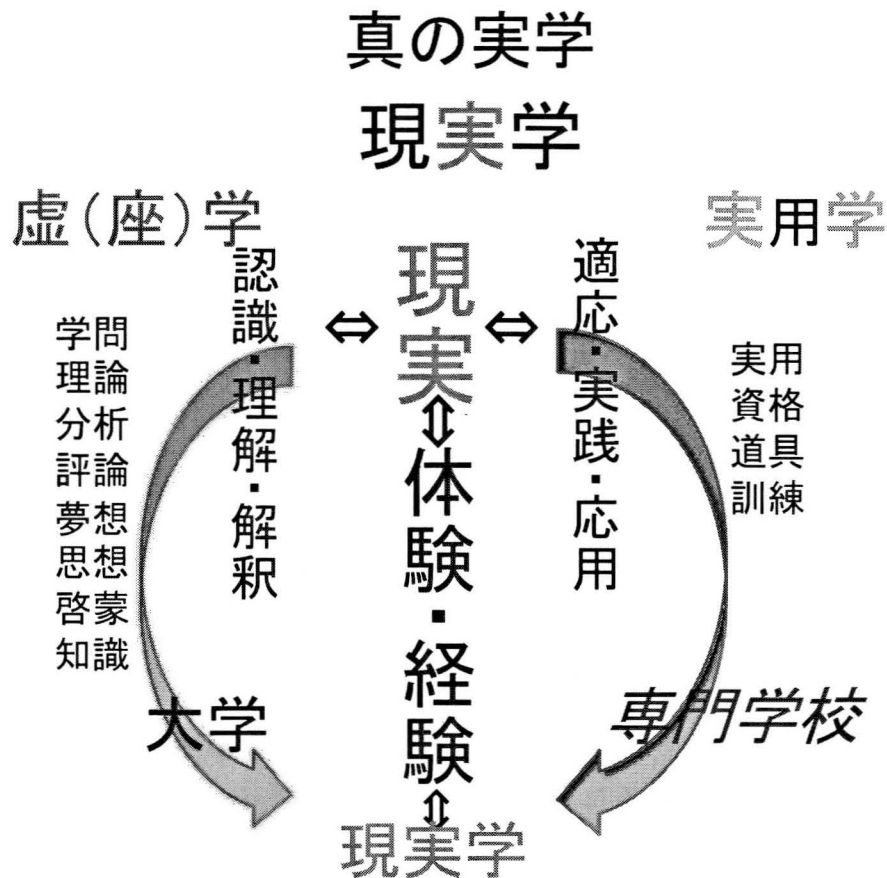
神奈川大学ではその教育方針を以下のように定めている。

「神奈川大学は人間教育を基礎とした『真の実学』を追求します」(神奈川大学将来構想2011年)

この『真の実学』というフレーズはなかなか厄介なものである。どのような経緯でこの『真の実学』なるフレーズが大学の教育方針と定められたのか、その基本的な思想と経緯については時系列的な議論の展開経過を含め一度徹底的に辿ることが必要であるが、ここではこの点については深入りしない。ただ本稿ではこの『真の実学』を所与のものとして扱い、以下の見取り図を提示することによって筆者自身のこの点に関する個人的解釈と主張を述べることにする。

## 2 『真の実学』の見方・考え方

図1 (注2)



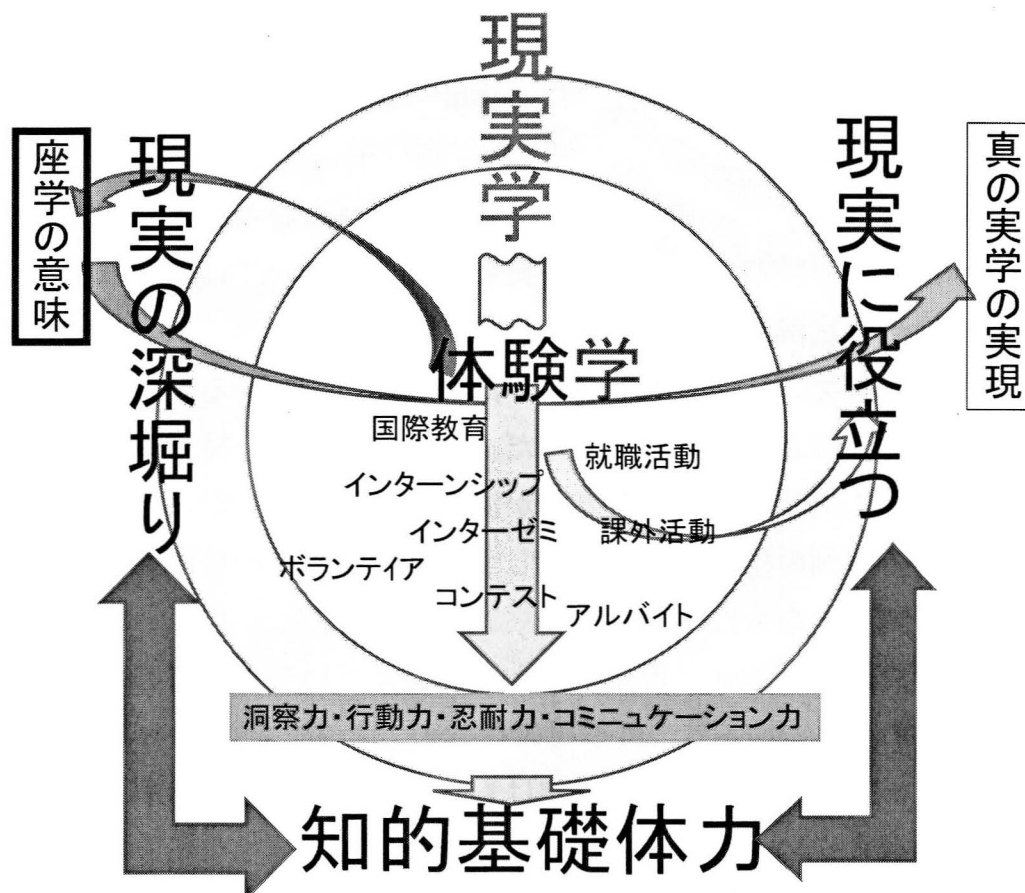
上記図1に関する最低限の解説

- ① 筆者はまずもって『真の実学』というタームを『現実学』というタームに置き換えている。真の実学を「現実学」と読み替え、その「現実」を中心 keyword にして本学の教育活動が展開されるべきであるという主張がそこには込められている。
- ② 大学、特に従来型大学における従来型教育活動のエリアを左側に列記し、専門学校での教育活動を右側に列記している。『真の実学』というタームに込められた意味は、従来型大学教育から一歩踏み出し、実用性を中心に置く専門学校をある程度意識し、同時にそれとの差別化を図るという側面があると想像したからである。したがって真の実学⇒現実学を中心縦軸に置き、左右に<虚(座)学>と<実用学>を配置することになる。

- ③ 虚学というのはもちろん偽物ということではないし、価値的に劣るということではない。むしろこの虚学こそが学問の中心であり真理の探究のカギである。虚学をいう言葉が誤解を生むとしたら「基礎研究」といってもよい。いずれにせよその主たる役割は認識・理解・解釈ということになり、それに係るタームが上図最左欄に「学問」以下、とりあえず思いつくままに列記されている。
- ④ 今日の大学は大学ユニバーサル段階にあると言われる。エリート⇒マス⇒ユニバーサルの段階を経て大学教育も大きく変貌を遂げなければならない外的・社会的状況があるにもかかわらず、教育の内容と大学運営のスタイルが依然としてエリート段階の大学像にとらわれているということは長年にわたって指摘されてきたところだ。そうした認識を持つ中で、本学においても「真の実学」なる教育方針が決定されてきたのだろう。そしてこの場合、図の右側の専門学校を意識しつつ、しかしその専門学校の教育との差別化が問題となる。
- ⑤ 筆者は「真の実学」＝「現実学」と読み替えているが、これが一応了解されたとすれば、「現実学」に不可欠なものとして、学生の体験・経験がクローズアップされる。従来、大学はもっぱら認識・理解・解釈を中心とした学問・教育を提供してきたが、そこから大きく一步を踏み出し、体験・経験の提供の分野にまで大学が踏み出すということが、現在、大学に要請されている、またそれが「真の実学」教育のひとつの核心であるというのが筆者の主張である。そのことがこの図1に表現されている。
- ⑥ ただし確かに上記は筆者の主張ではあるが、この主張には神奈川大学の日本の大学全体の中での位置（大学の運営、学生の志向、大学運営のこれまでの経緯などを含めた位置）を念頭に置いたものである。東京大学における教育を論じる場合、あるいは限りなく専門学校的な教育を要請され、またそれを目指している教育機関でこの問題を論じる場合はまた別なニュアンスになるのであろう。
- ⑦ 次に提示する図2は図1で提示された全般的状況認識を神奈川大学、特に経営学部国際経営学科にひきつけて、具体的に論じようとしている。

### 3 体験の提供と座学の効果

図2 (注3)



上記図2に関する最低限の解説

- ① 図1の最低限の解説⑤で論じた体験・経験の提供は、実は神奈川大学経営学部国際経営学科においてもすでに様々な形で実行されている。大学全体としては体験学の担い手は学部教授会以上に事務局担当部署という場合が多いが、経営学部のひとつの特徴はそうした体験・経験提供を学部カリキュラムの中で意識的に行っていることであるといえる。
- ② 円の内側に列記されている様々な教育活動は強弱の差こそあれそれを有機的に座学と関連させることができるというのが筆者の主張であり、同時に経営学部の伝統的な思想である。そしてこのことの再確認と更なる内実化は、今後ますます重要になるように思われる。
- ③ 筆者は就職担当副学長として全学的就職支援にかかわっているが、企業・

団体における求められる人材は洞察力・行動力・忍耐力・コミュニケーション力というものであると日々痛感している。その意味でもこの体験の提供と、それに有機的にかからむ座学の充実は最重要課題であり続ける。

- ④ 問題はどのようにしてその体験・経験を教育カリキュラム、特に座学の部分と有機的に関連付けるかという点であろう。そしてそれを実効的にどのように進めるかということであろう。
- ⑤ ボランティアはそのような大きな枠組みの中で位置付けられよう。これを教育活動の一環として位置付け、大学としてこの活動に対して全面的かつ直接的にその運営の主体となるというのが今回の「KU“東北”ボランティア駅伝」の基本的思想である。

#### 4 「東北ボランティア駅伝」の構想と運営

上記1-1で論じた本学の教育方針『真の実学』を大きな背景とし、上記図1・図2で示したその大きな看取り図の中に今次の「KU“東北”ボランティア駅伝」は位置付けられる。従って、今次の取り組みは、純粋なボランティア活動の枠を越え、教育活動の一環であるというのが筆者の考え方である。実際そうした視点でこの「KU“東北”ボランティア駅伝」は実務的にも運営されている。大学としてもそれ相当の費用支出もあり、当然、費用対効果の側面を無視するわけにはいかない。この場合の効果は主として教育的効果ということになる。現在進行形のこの取り組みの効果はある段階で徹底的に検証される必要がある。

冒頭に述べたように本取り組みについては、その思想、経緯、実際の展開実績、学生の反応、広報的效果、費用対効果、その他の面に関し、総合的・包括的に纏めの作業がある段階で行われることになろう。この国際経営フォーラムでの寄稿というよりは大学の出版物としてそれは提示されることになろう。

#### 5 おわりに

「国際経営フォーラム」は国際経営研究所の出版物であることに鑑み、研究

所構成員に対して、まずはお礼を述べておきたい。本稿執筆中の2011年7月中旬において研究所全員がそのメンバーである経営学部は、参加学生数においても協力（引率）教員数においても他学部のそれを大きく凌駕している。教育活動の一環としての今次の取り組みの意味を学部として深く理解しているためではないかと思う。なお大学全体としてはこの時点（2011年7月20日）において参加者数はすでに450名ののぼり、9月末までの参加予定者数を含めると800名に迫る勢いである。大きな取り組みとなりつつある。この実績を踏まえて、教育的意味付けをさらに論じ、実際に展開していきたいものである。

（注1）筆者、石積勝は副学長として今次の「KU“東北”ボランティア駅伝」の統括責任者として現在も活動中である。本稿は筆者がその編集責任者となることが予定されている正式な総括レポートあるいは報告書とは一線を画する。あくまでも筆者の一教員としての現時点での問題意識を反映させたものとして論述されている。

（注2）本学教育方針に関する教学幹部の間での意見交換会に向け筆者が準備したレジュメの一部である。（2010年7月）

（注3）同上

追記：本稿執筆中に、読売新聞（2011年7月19日 朝刊・東京本社版）に本学の「KU“東北”ボランティア駅伝」の活動が取り上げられた。現時点での活動の内容が分かりやすく包括的に紹介されている。第一部 教育活動の一環としてのボランティア活動(石積文責)と第二部の間を埋めるものとして、以下、参考にしていただきたい。